ESDを支える仕組みづくり

本格稼働・ESD活動支援センター

ネットワークの構築を目指す

わが国のESD推進体制を構築することを目指して、昨年4月に文科、環境両省の提案で開設されたESD活動支援センター。その設立趣旨と今年度の活動方針等について、同センターから報告してもらった。

国連ESDの10年の間、ESD（持続可能な開発のための教育）は全国各地の学校で、あるいは社会教育施設、NGO／NPO、企業など、多くの組織・団体や人々によって推進されてきた。

ESDの推進拠点として位置づけられたユネスコスクールをはじめとする学校でも、平和、環境、エネルギー、生物多様性、人権、防災、福祉、文化遺産、地域学習などを入り口としてさまざまに実践され、成果を上げてきた。

そのような学校における実践は「ESD推進のためのユネスコスクール宣言（ユネスコスクール岡山宣言）」（2014年、ユネスコスクール世界大会・第6回ユネスコスクール全国大会）の、次の表現に凝縮されている。

「ESDのビジョンに導かれた教師の意識に変容が生まれました。知識を伝達するばかりではなく、子供とともに学びながら、子供中心の学びをデザインし、コーディネートする教師の姿勢は子供たちを変え、子供たちが変われば学校が、学校が変われば地域が変わるという実例が見られるようになりました」

一方で、課題も明らかになった。取り組みが一部の学校に限られている、優れた実践事例の共有が十分でないなどが挙げられる。社会全体をみても、持続可能な社会を構築していくために、一人ひとりの考え方や行動が変容の学びとして、ESDが十分に認識されていない状況がある。

そこで、文科省と環境省は、持続可能な社会の実現に向け、ESDに関わるさまざまな主体が、分野横断的に協働・連携してESDを広め、深めるのを目的とする「ESD推進ネットワーク」の構築を提案した。そしてESD国内実施計画に「ESD活動支援センター（全国・地方）の整備と、地域の実態を踏まえた効果的な運用をはかっていくこと」が政策的支援策として、また地域コミュニティにおける取り組みとして記載された。

ESD推進ネットワークの地域におけるESD活動の窓口となる「地域ESD活動推進拠点（地域ESD拠点）」、広域的なハブ機能を果たすため都道府県を超えた広域ブロックにおけるESD活動の支援や地域ESD拠点と連携した活動等を行う「地方ESD活動支援センター（地方センター）」、ESD推進ネットワークの全国的なハブ機能を果たす「ESD活動支援センター（全国センター）」が、ESD推進ネットワークの主たる構成者となり、連携・協力してESDを推進していく構想である。

まず、全国センターが、昨年4月22日に東京都渋谷区に、ESD関係省庁により、官民協働のプラットフォームとして開設された。全国センターでは相談対応を行うほか、ウェブサイトなどを通じて情報の発信を行い、ESD推進ネットワーク全国フォーラムを開催してきた。またESD推進ネットワークの形成を、現場レベルでの業務に落とし込むための考え方の整理やルールづくりをして、ネットワークの基盤整備に進めてきた。

次の段階として、平成29年7月をめどに、札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、高松、熊本に、それぞれ地方センターが開設される。また地域ESD拠点の形成が開始され、平成29年度はESD推進ネットワークがいよいよ稼動する段階となる。

持続可能な社会形成の学びは、持続可能な開発目標（SDGs）達成のための学びでもある。

ユネスコスクールやユネスコスクールのネットワーク、ESDコンソーシアムなど、これまでのESDの先駆者である組織団体が、地域ESD拠点として、あるいはそのほかの立場で、ネットワークの構築に関わることで、さまざまな実践者の学び合いが進み、それぞれの活動がより活発に、より深まり、より広がることが期待されている。

ESD活動支援センター＝〒150－0001 東京都渋谷区神宮前5－53－67、コスモス青山B1階／TEL03（6427）9112。URL＝http://esdcenter.jp/

ESD推進ネットワーク形成に向けた動き

2014年8月／2015年8月
「国連ESDの10年」後の環境教育有為新方策懇談会が報告書（環境省）および「持続可能な開発のための教育（ESD）のさらなる推進に向けて」（日本ユネスコ国内委員会教育小委員会ESD特別分科会）において、今後のESD推進におけるネットワークの必要性が提示される。

2016年3月
「ESD推進ネットワークの構築に向けて」（ESD活動支援企画運営準備委員会）の中で、ネットワークの目的・体制・機能と役割分担について記載される。

2016年3月
「我が国におけるESDに関するGAP実施計画（ESD国内実施計画）」（持続可能な開発のための教育関係省庁連絡会議*）の中に、ESD推進ネットワークの形成とESD活動支援センター（全国・地方）の整備と効果的な運用が、政策的支援と地域コミュニティ関連の柱として記載される。

2016年4月22日
ESD推進ネットワークの全国的なハブとして、関係省庁は民間団体との連携事業としてESD活動支援センター（全国センター）を開設。全国センターは2016年度、ネットワークの枠組みの整理や目標設定、情報発信の基盤整備等に取り組んだ。

2017年7月～
地方ESD活動支援センター（地方センター）の開設を目指し、2016年秋から準備委員会が開催されている。地方センター開設後、地域ESD活動推進拠点の形成がスタートする。

＊持続可能な開発のための教育関係省庁連絡会議：持続可能な開発にかかわる省庁が連携してESDを進めるべく設置。2017年3月現在、12省庁が参画する。（文科省、環境省、内閣官房、内閣府、総務省、外務省、農水省、経産省、国交省、法務省、厚労省、消費者庁）

持続発展教育 Education for Sustainable Development

ESDの魅力

みんなで挑戦してみませんか

横浜市立永田台小学校長　住田 昌治

その11

対局を中心に向けESDフローラ

「ESDを分かりやすく、シンプルに伝えることができないだろうか」という問いから始まった連載も今回で最後となる。ESDの魅力が伝わっただろうか。1年を通して、さまざまな窓を通して、持続可能な未来を見いだそうとしてきた。

そして、最近の講演会や資料等では、「ESDとは何か。子供たちみんなが『生まれてきてよかった』と思える社会。高齢者の誰もが『長生きしてよかった』と実感できる社会。そんな生きやすい社会の実現に向けて、私たちに何ができるか考えて、行動できるようになること」だとお伝えしている。

誰にでも分かる言葉で、持続可能な未来社会を伝えようとしたとき、今ここをしっかり見てプロセスを考えなければならない。持続可能な未来に向けて効率的に突き進むことを求めるがあまり、事実をないがしろにしてはいけない。目の前にある現実をしっかり向き合い、ことの本質を捉え、解決に向かうようにさまざまな関係者と協働していかなければならない。

大人は子供の憧れでなければならないし、大人は高齢者を支えることができなければならない。もし、大人になるのが楽しみだと子供が思えないようなら、持続可能な未来の担い手になろうという気持ちは起こらないだろう。

結局、このESDという教育は、大人の問題であり、対象は大人である私たち自身なのである。私たち大人は、家庭で、学校で、社会で、日々子供から見られている。子供たちが「生まれてきてよかった」と思えるような社会にしているだろうか。私たちの生活を見直して行動や生活を変えていくことが、子供たちの持続可能性を学ぶ一番の環境になるのだと考える。

ESDを一言でいうなら「変革」であり、自ら、その価値と行動・生活を変えていくことに他ならない。これまで当たり前のように行われてきたことを見直し、そのつながりを再構築していくことがESDなのである。

持続可能性に関わる多様なテーマがある。学校では、教室＝授業、学習課題、ガバナンス、コミュニケーション、地域性など多様な視点がある。それらには必ず対局がある。二者の距離を互いにバランスよく縮め、つないで考え、徐々に両者が中心に近づいていって持続可能になる。花びらのようなESDフローラである。

例えば、「世界・身近＝世界共通の課題を身近な課題に変換して取り組む」「教科・総合＝教科のカベを超えて、総合との関連的な学習を展開する」「学校……

・地域＝地域の課題を学校の課題として引き受けて考える」「授業・生活＝授業での学びを日常生活に生かす」「教室・職員室＝教室で求めることを、職員室で体現する」などである。

それは、正に変革であり、今まで当たり前だと思ってきたことを見直し、変える挑戦でもある。持続可能な未来のために、境目を超えて、つながり合う教育こそ、今求められているのだと思う。

最後にESDに挑戦する皆さんへのメッセージを贈りたい。

「とらわれない・おそれない・あきらめない＝学び続ける者をエンパワー（元気づける）するのがESD！」

（おわり）

対局を中心に向けESDフローラ（2016、住田）

第7回ESD大賞　ユネスコスクール最優秀賞受賞校

宮城県気仙沼市立唐桑小学校

カキ養殖で海洋教育

地元の海の豊かさを知る

6年生によるカキの収穫・カキむき体験

第7回ESD大賞（主催・NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム）で、ユネスコスクール最優秀賞を受賞した宮城県気仙沼市立唐桑小学校は、カキ養殖の体験活動を通して、地元の海の豊かさを、実感を伴い、深く学んでいる。

◇　◇　◇

1．ねらいと目指す児童像

唐桑小学校では、従前から、地域の漁協青年部と連携して、各種の活動を展開している。昨年度、この取り組みに対して、農林水産祭天皇杯賞を受賞した。唐桑地域はNPO法人「森は海の恋人」の活動拠点であり、カキ養殖に適した環境である。全校を養殖を中心に取り組み

この体験を通して、唐桑の人との関わりを実感し、

目指す児童の豊かな

豊かな心を

と唐桑を愛

と設定。

を「海に親

わり、海

洋教育の推

る。唐桑

受けて成

とを体験

し、自然

践力など

2．取り組

特色は、

体験等の源

②教科等と

容③多くの

連携④プロ

・推進に地

関わる―

外部連携

援委員会

るのも大き

校、PTA

県漁協唐桑

公民館、源

東京大学海

ス、NPO

の恋人」が

3．昨年度

▽1・2

「海に親

世界の人々と協働する体験を子供たちに！――。ジャパンアートマイル（JAM）では、「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」（後援・文科省、外務省）に参加する小・中・高校の募集を開始した。

同プロジェクトは、海外のパートナー校の子供たちと、環境、文化、平和などを共通テーマとして、インターネットを活用して交流学習を実施。その後、学習成果を絵に表し、

世界につながる確かな体験